

「人類社会の進化史的基盤研究(3)」 第2回(通算第11回)研究会

日時:2014年8月2日(土) 午後1時~7時

場所:AA研棟3階マルチメディアセミナー室(306号室)

報告者:

1. 全員(司会:河合香吏)
2. 竹ノ下祐二(AA研共同研究員・中部学院大学)

内容(要旨)

1. 「ブレインストーミング」(全員/司会:河合香吏)
以下の項目について、報告、および全員で議論をおこなった。

1. 報告事項(成果公開の詳細がすでに決定しているもの)

1-1 進化人類学分科会シンポジウム

「人類の社会性とその進化:共在様態の構造と非構造」

- ・日時:2014年11月3日(月・祝)、午前中(2時間)10:30-12:30?
- ・場所:アクトシティ浜松(東海道新幹線浜松駅に隣接)
- ・パネリスト:足立薫(京都産業大)、曾我亨(弘前大)、内堀基光(放送大)
- ・コメンテーター:坪川桂子(京都大)、真島一郎(AA研)、諏訪元(東京大)

・オーガナイザー&司会:河合香吏(AA研)

1-2 『制度:人類の社会の進化』の公開合評会→公開シンポジウムに格上げ。

- ・日時:2014年12月6日(土)、午後1時~5時頃
- ・場所:AA研棟3階301号室
- ・主催:AA研基幹研究・人類学班「人類学におけるミクローマクロ系の連関」
- ・司会および対象書籍の概略説明:河合香吏
- ・所外コメンテーター:野村雅一、山極寿一、名和克郎
- ・所外ディスカッサント:足立*、黒田*、北村*、内堀*、春日、船曳、ほか
- ・所内ディスカッサント(基幹人類学班員):西井、床呂

1-3 科研費の申請:成果公開・学術図書

『制度』の英語版刊行。

- ・再度申請する予定。

2. 審議事項(計画中の成果公開案)

2-1 人類社会の進化史的基盤研究(3)の成果論集

書名:『他者:人類社会の進化(仮)』

- ・2015年度内に出版(2016年3月末刊行)
- ・AA研の出版経費に応募(2015年7月ないし10月末〆切)

2-2 『フィールドプラス』No. 15の巻頭特集（2015年9月末〆切）

- ・「集団」「制度」「他者」にわたる内容にする（あるいは最低ひとつでも可？）。
- ・ タイトル案
 - 「ともに生きることの進化論：霊長類学と人類学からのアプローチ」
 - 「『社会』のなりたち：霊長類学と人類学からのアプローチ」
 - 「社会性の進化論：霊長類学と人類学からのアプローチ」
 - 「ヒトの社会性はどこから来たのか：霊長類学と人類学からのアプローチ」
- ・ 執筆者案：河合香吏（巻頭言）、伊藤詞子、寺嶋秀明、杉山祐子、大村敬一

2-3 来年度の霊長類学会・自由集会（2015年7月）

- ・ 持ち時間：2時間30分
- ・ オーガナイザー、司会および趣旨説明：河合
- ・ タイトル：未定
 - ex. アイデンティティ、「移籍」再考、ヒト屋とサル屋の共同研究とは？ etc.
- ・ 発言者案：中村、西井、北村（→曾我／河合／梅崎…？）、
- ・ コメンテーター案：スプレイグ、竹川、藪田？

2-4 公開シンポジウム：AA研基幹研究人類学班 or 進化人類学分科会

「人類社会の進化史的基盤を考える：霊長類学と人類学からのアプローチ」

- ・ 目的：10年間の共同研究の総括。集団/制度/他者を貫く議論を展開し、人類社会の進化についての新たな理論的視座を提出する。
- ・ 日程：未定（2015年6月頃 or 11月頃 or 2016年2-3月頃）
- ・ 時間：午後1～6時（5時間程度）
- ・ オーガナイザー、司会および趣旨説明：河合
- ・ パネリスト候補：竹ノ下、早木、杉山、寺嶋、床呂、船曳
- ・ コメンテーター候補：中川、梅崎、春日？

3. 新規共同研究課題申請に向けて

- ・ 「人類社会の進化史的基盤研究（4）」として、継続的に申請する。
- ・ 大きく分けて4つのテーマを検討。すべてを含むような主題を模索・議論。
 - ① 環境 Umwelt
 - ② 正義 Justice
 - ③ 同調 Following / Sympathy
 - ④ 生涯 Life-history

4. その他

- ・ AA研50周年記念講演・シンポジウム（2014. 10. 24）について
- ・ ジャーナルへの投稿募集

2. 「ヒトにおける協同育児の進化と他者の出現」 (竹ノ下祐二)

1 はじめに

われわれヒトは協同育児者 (cooperative breeder) であるとされる (cooperative breeding は一般的には"協同繁殖"と訳されるが、哺乳類においては育児における協同を指すので、以下、本発表では協同育児と記す)。協同育児とは、親以外の個体、とくに、もっか育児中でない個体が子どもの世話に加わる育児システムのことである。一方、ヒトにもっとも近縁である現生大型類人猿は協同育児者ではない。人類の系統のみで協同育児が進化した要因については、生態学的、生活史的、認知的背景からさまざまな説明がなされている。ただし、先行研究においては、もっぱら育てる側 (caregiver) の視点からの説明に終始している。つまり、実子を他個体に委ねる母親と実子でない子どもの世話をする個体にとっての協同育児の利益、利益をもたらす環境条件、それを可能にする認知的条件について論じられている。しかし、協同育児が成立するには、子どもすなわち育てられる側 (care receiver) が母親以外による養育行動を受容する、あるいは要求することが不可欠である。トリヴェアースによる古典的な「親子の葛藤」理論が示すように、育児の最適戦略は親子で異なる。協同育児の利益とコスト・リスクもまた母子間で異なるはずだ。よって、協同育児の進化をあきらかにするには、子どもの視点にたった研究が必要である。そうした問題意識のもと、私は現在動物園の飼育ゴリラとヒトの乳幼児を対象に、子どもが親以外の個体とどのようにかかわるかの比較研究にとりくんでいる。本発表では、ヒトにおける協同育児の進化を探求することを通じて「他者」の進化史的基盤を論じる糸口を探りたい。

2 協同育児から「他者」を考える3つの糸口

2.1 分業としての協同育児

2.1.1 分業が「自己の内なる他者」をつくる

チンパンジーやゴリラなど大型類人猿は、他個体の意思や感情を推測し、それに応じた行動をとることができる。それは、心の理論や共感力を通して、他個体の身になって考えることができるからである。他個体の身になるとは、他個体を"自己"のようなものとみなすことである。相手が敵か味方かはさておき、「自己と同じようなものとして捉えられた他個体」は"他者"の萌芽といってよい。だが、それが真の他者となるには、自分を"他者"のようなものとみなすことが不可欠である。他者の内に自己を見だし、同時に自己の内に他者を見出すことによって、自己と他者が対になって出現するのである。そして、この「自己の内に他者を見出す」ことが、大型類人猿にはみられない、ヒト特有の心性と考えられる。ヒトは、自分を客観的に眺め、過去や未来の自分を、「いま・ここ」にいる自分とは隔りのある存在として他個体と同等に扱うことや、現在の自分に定位して「当時の自分」の身になる、メンタルタイムトラベルを行なうことが知られているが、大型類人猿にとって自己は唯一無二の自己でしか

いようだ。

ヒトにおいて「自己の内なる他者」はいかにして出現したのか。それは、分業の進化と深いかかわりがあると考えられる。協力行動や食物分配は大型類人猿にもみられる。だが、それらはあくまで「いま・ここ」における協力であり、その場にある食物の分配である。それに対して、ヒト社会における協力行動には手分けしてほうぼうで仕事をする(「おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に」というものがあり、食物等の資源を持ち寄って分配する。食物の持ち寄りには大型類人猿にはみられない。

手分けして働き、その成果を持ち寄って再分配するという高度な分業システムにおいては、自分の「すべきこと」が自分の生理的欲求から乖離する。この乖離が、自己を欲求する存在と分業する存在に二分化し、互いを「内なる他者」として認識するのではないだろうか。

2.1.2 分業社会における教育

Czro & Hauser (1992) は「教育」を動物行動学的に定義し、その進化の条件を論じた。それによると、教育行動が進化しやすいのは、生存に必要な技術を観察によって学ぶ機会が少なく、かつ、それを試行錯誤によって習得するのが非効率であったり高リスクな場合である。具体的には、単独で危険な動物の狩りをする食肉類が典型例としてあげられている。霊長類の多くは集団で暮らし、食性は植物食を中心とした雑食性である。したがって、何が食物であるかを観察によって学習する機会は豊富にあるし、サソリなどの危険な動物と異なり、採食にリスクや困難な技術はほとんど存在しない。だから、霊長類では Caro & Hauser 的な意味での教育は進化しにくいはずだ。にもかかわらず、ヒトは際だって教育好きな存在である。それはなぜだろうか。

Caro & Hauser は、教育を利他行動-短期的には教師の適応度を減らし、生徒の適応度をあげる行動-だとする。しかし、ヒトの分業社会においては他者が生存スキルをあげることは利他的とも利己的ともいえない。なぜなら、他者はその向上した生存スキルを用いて分業に参加するからである。子どもに狩猟技術を教えることは、子どもの生存スキルを高めると同時に、集団全体の生産力の向上につながるからである。すなわち、ヒトにおける教育は、子への利他行動というよりもむしろ、子に分業の一端を担わせるための行動、Trivers (1974) が指摘するところの、「子の操作」として進化したのではなかろうか。だとするならば、協同育児の進化と分業の進化は切っても切れない関係にある。

2.1.3 大型類人猿における育児の協働 (collaboration)

そもそも、協同育児とは育児における分業であり、生業における分業の一部である。だから協同育児の進化とは分業の進化にほかならない。ゴリラやチンパンジーは協同育児者ではないが、アカンボウに対して母親以外の個体が積極的にかかわり、子どもの発達に貢献しているのは確かである。これを"育児における協働 (collaboration)" と呼びたい。大型類人猿における食物分配は、ヒトにおけ

る分業の進化を考察する材料をあたえるものであるが、ならば大型類人猿における"育児における協働"もまた、ヒトの分業の進化、そして「他者」の出現に重要な示唆をあたえるであろう。育児における協働は、食物分配よりもはるかに高頻度で、日常的に生起する現象でもある。

2.2 子どもの社会的発達プロセスにおける他者のあらわれ

他者の定義はさまざまであるが、他者には身内ではない"よそもの (stranger)" という意味合いもある。通常、"よそもの" は集団の外からあらわれるが、子どもは集団の中に出現する特殊な"よそもの" である。そこで、協同育児や育児における協働の場面におけるアカンボウとアロマザーたちの相互交渉の観察から、"よそもの" が"みうち" になる過程について洞察を得られるかもしれない。

名古屋市東山動物園のゴリラのアカンボウ、キヨマサに対して、同居する父親と姉は、生後すぐからきわめて強い関心を示し、アカンボウの関心を引こうとさまざまなちょっかいを出した。しかし、アカンボウを強引に自分にひきよせたり、アカンボウが自分のもとを去ろうとするのを力づくで拘束したりはしなかった。アカンボウが母親から離れ、よちよちと外部を探索しはじめると、父と姉はかれの関心空間の中に自己を提示し、アカンボウがそれに応答することによって社会交渉がはじまっていた。つまり、アカンボウ=応答するもの、他個体=はたらきかけるもの、という相補的關係が成立していた。アカンボウによる関心空間の探索は方向性をもたず、そこに自己を提示する他個体はおそらく他者ではなく環境の一部としてあらわれているに違いない。一方、はたらきかけるものである他個体は、母親のもとを離れ、自分たちの空間に侵入してくるアカンボウ="よそもの" に他者を見いだすがゆえに、「はたらきかけて応答を待つ」というある種の遠慮を示すのであろう。その意味で、生後 1 年未満のゴリラのアカンボウは集団の成員にとっては一方的な他者である。

生後 1 年を過ぎるころになると、アカンボウ自らが明確な意思をもって父や姉に接近するようになる。その際には、自分がされたように、父や姉の近くについて、さまざまなはたらきかけを行いながら相手の応答を待つのである。生後 1 年未満の頃に、相手に応答し社会交渉をむすぶなかで、相手の中に他者を見出してきたのだろう。ここで、アカンボウと他個体がともに「はたらきかけ、応答するもの」となり、両者の關係が双称的になる。

おもしろいことに、こうした「はたらきかけて応答を待つ」というある種の遠慮深さは、母子のあいだでは生後 1 年を過ぎてもまったく見られない。少なくとも母親にとって、アカンボウは"よそもの" ではないようだ。しかし、母親と成熟した娘とのあいだには遠慮が見られる。今後、母親が自分の子に他者を見出すプロセスがみられるはずで、注意して見まもってゆきたい。

ヒトの母子關係と比較すると、ヒトの母親はもっと早い段階から、アカンボウに対してちょっかいをだす、つまり「はたらきかけて応答を待つ」という、"よそもの" への態度をとるのではないだろうか。協同育児が進化したヒト社会においては、母親は育児者のひとりとして相対化され、母子關係の"他者"化が生

じているといえるかもしれない。この点については、今後ヒトの育児集団における母子の**社会交渉の観察を通じて探求してゆきたい**。

2.3 母・子・非母養育者の三者関係における他者のあらわれ

他者には、当事者でない他人、第三者という意味あいもある。協同育児研究はそこにも示唆を与えてくれるだろう。東山動物園のゴリラによる育児における協働の場面では、母、子、母以外の個体という三者のそれぞれが、三者のうちの誰かと**社会交渉**を持つ際に、相手だけではなく、第三者のふるまいも注意深くモニタリングし、交渉のありかたを調整している。

生後 1 年未満のころ、父や姉がアカンボウと交渉をもつ際には、常に母親の動向を気にしていた。一方の母親も、常にアカンボウと他個体の様子を注意深くモニタリングし、状況に応じてアカンボウへの他個体のアプローチを制限したり、逆にアカンボウを他個体に委ねたりしていた。また、生後 1 年を過ぎるころになると、アカンボウ自身が、母親以外の個体と関る際に母親が自分をモニタリングしているかに注意を払うようになった。自ら母親のもとを離れてシルバーバックに接近し、母親がついてきていないとわかるやいなや激しく母親に抗議する行動をとることもある。ここからいえるのは、母子関係は二者のあいだでの相互交渉のみによって発達変化するのではなく、非母-子関係がそれに影響を与えているということだ。逆に非母-子関係の発達形成には母親が決定的に重要である。協同育児あるいは育児における協働の場面では、三者のかけひきを頻繁に観察することができ、社会関係における第三者としての他者の様相に迫る材料を得ることができると考えられる。